

検査の見方

身体計測		BMIは体重〔kg〕÷（身長〔m〕×身長〔m〕）から計算される体格指数で、25以上は「肥満」と判定されます。腹囲が男性85cm以上、女性90cm以上の場合は内臓脂肪型肥満の疑いがあります。	
血圧		血圧は1日の中でも変化がありますが、高いまま放置すると脳や心臓の病気を引き起こすことがあります。	
■高血圧の診断と分類 収縮期(最高)血圧 180 160 140 130 120 80 85 90 100 110 (単位/mmHg) 拡張期(最低)血圧 ■Ⅲ度高血圧(最高180～かつ/または最低110～) ■Ⅱ度高血圧(最高160～179 かつ/または最低100～109) ■Ⅰ度高血圧(最高140～159 かつ/または最低90～99) ■正常高値血圧(最高130～139 かつ/または最低85～89) ■正常血圧 ■至適血圧			
聴力		日常会話域の代表として1000ヘルツと、加齢に伴い聞こえにくくなる高音域の4000ヘルツの音を使って難聴の有無を調べます。	
眼科	視力	遠くを見る時の視力です。(5m視力)	
	近視力	近くを見る時の視力です。(30cm視力)	
	眼圧	緑内障の可能性を判断する目的で行います。	
	眼底		網膜、視神経、血管の状態などを観察し、眼底に異常がないかを調べます。
		K.W.(キースワグナー)	動脈硬化の進行度を表す指標のことで進行度に応じて0～Ⅳで表しています。(0が正常)
ScheieS (動脈硬化性変化)		血管の壁が硬くなってきている変化を0～4で表しています。高血圧や糖代謝異常・脂質代謝異常から起きていることもあるので、生活習慣の見直しが必要です。(S0が正常)	
	ScheieH (高血圧性変化)	高血圧の影響で網膜の動脈全体が細くなったり、部分的に狭窄している変化を0～4で表しています。(H0が正常)	
尿検査	蛋白	腎臓・尿管・膀胱・尿道などに問題(腎炎・ネフローゼなど)があると、陽性になることがあります。	
	潜血	腎臓・尿管・膀胱・尿道などに問題(腎炎・尿路結石・膀胱炎など)があると、陽性になることがあります。	
	沈渣	赤血球・白血球や細胞の形態を観察し、細菌感染の有無や腎臓病を発見します。	
便潜血		肉眼では分からない出血の有無を調べることにより、大腸がんや大腸ポリープなどの病変の可能性を調べます。	
循環器	心電図	心臓が収縮する時に発生する電気信号を記録して、心臓の働きに異常がないかを調べます。	
	心臓超音波	心電図ではわかりにくい弁膜症や心筋症・先天性の心臓病などの診断に役立ちます。	
	NT-proBNP(心不全検査)	心臓から分泌されるホルモンです。この値が高いと心不全など、心臓の機能に問題がある場合があります。	
動脈硬化(血圧脈波)		手と足の血圧と脈波を同時に測定することにより、血管の硬さや下肢動脈のつまりの有無を評価します。	
胸部	レントゲン(肺野・縦隔)	肺がんや結核・肺気腫など肺に異常がないか調べます。	
	レントゲン(心臓・大血管陰影)	胸部レントゲン検査により、心臓の大きさや大動脈などの血管の形を知ることができます。	
	CT	胸部を輪切りにした断層画像によって、より精密に肺の病変を見つけるために行います。	
肺機能		肺活量、最初の1秒で吐き出した息の量など、肺の換気能力を調べます。	
骨密度		微量の엑스線を用いて骨密度を測ります。骨粗鬆症を早期に発見するのに有用な検査です。当院では前腕を使って測定します。	
胃部	レントゲン	バリウムを使用し、食道、胃、十二指腸など上部消化管の異常の有無を調べます。	
	内視鏡	内視鏡を使用し、食道、胃、十二指腸の粘膜を直接観察することができます。	
大腸	内視鏡	肛門から内視鏡を挿入し、大腸の粘膜を直接観察します。	
	CT	肛門から炭酸ガスを注入し腸を膨らませ、CT撮影し3D画像で大腸を調べます。	

腹部	超音波	主に、胆のう・肝臓・腎臓・膵臓・脾臓・大動脈の形態的な変化を観察します。無害で痛みなく身体の内부를観察できる検査ですが、骨・空気(ガス)・皮下脂肪により臓器が観察しにくいこともあります。
	CT	腹部を輪切りにした断層画像によって、腹部(胆のう・肝臓・腎臓・膵臓・脾臓等)の病変を見つけるために行います。
甲状腺	超音波	超音波を用いて、甲状腺の腫大や腫瘍などの異常がないかを調べます。
	TSH	血液検査により、甲状腺の機能を評価します。
	抗TPO抗体	
乳腺	超音波	超音波で乳がんや良性腫瘍を見つける検査です。痛みを伴わない検査です。
	マンモグラフィ	乳房を圧迫して平らに伸ばした状態でX線撮影し触っても分からないような小さな腫瘍を見つけます。 ＜カテゴリーについて＞ カテゴリー1：異常なし カテゴリー2：正常範囲 カテゴリー3：悪性の疑いを否定できない カテゴリー4：悪性の疑いあり カテゴリー5：悪性
婦人科	内診	子宮・卵巣・膣・外陰部の異常の有無を視診・触診で調べる検査です。
	子宮頸部がん(細胞診)	子宮頸がんの有無・疑いを細胞を採取して調べます。
	HPV	子宮頸がんの原因であるHPV(ヒト・パピローマウイルス)に感染しているかどうかを調べます。
	子宮体部がん(細胞診)	子宮体がんの有無・疑いを細胞を採取して調べます。
	子宮卵巣超音波	卵巣・子宮に腫瘍がないか膣から超音波で検査します。
血液一般	赤血球系	貧血や多血症（血液が流れにくくなったり、詰まりやすくなる）などの有無を調べます。
	白血球	白血球は体内に細菌などの、異物・外敵が入ってきたときに身体を守る役割をします。そのため身体のどこかで、炎症が起きると値が上昇します。また、低値の場合には感染しやすい状態になっていると言えます。
	血小板数	出血した時、血が出るのを止める役割を担っているのが血小板です。低値の場合は出血しやすくなり、高値の場合は血栓が出来やすくなります。
肝機能	AST(GOT)	どちらも肝細胞に多く含まれており、肝臓病の診断に欠かせない検査です。ASTについては心筋・骨格筋・血球にも含まれており、心筋梗塞や筋疾患でも上昇します。
	ALT(GPT)	
	γ-GT(γ-GTP)	肝臓や胆道の病気で高値になります。特にアルコール性肝障害の時に上昇します。
	総蛋白	血清中の蛋白質です。肝臓や腎臓の機能障害や、身体の栄養状態を調べます。
	アルブミン	
	総ビリルビン	ビリルビンは古くなった赤血球が壊される際にできる黄色い色素です。高値の場合は赤血球の異常や、肝臓・胆道などの異常が疑われます。
	ALP	主に肝臓の機能が反映されます。肝臓・胆のう疾患以外の、他の臓器の疾患でも異常値となることがあります。
	コリンエステラーゼ	
脂質代謝	総コレステロール	コレステロールは細胞膜や胆汁・ホルモンなどの材料として重要な役割を果たしていますが、値が高すぎたり、LDL（悪玉）とHDL（善玉）のバランスが悪いと動脈硬化を促進し、脳疾患・心臓病などの原因ともなります。低値の場合は甲状腺疾患や肝臓病、栄養失調などを疑います。
	HDLコレステロール	
	LDLコレステロール	
	non-HDLコレステロール	総コレステロールからHDLコレステロールを引いた値で示され、すべての動脈硬化を引き起こすコレステロールを表します。食事の影響を受けにくいと言われています。
	中性脂肪	食後10時間以上経過し測定したものを空腹時中性脂肪といいます。食後3.5～10時間未満の状態です測定したものは随時中性脂肪といいます。高いと脂肪肝や肥満などを引き起こします。
糖代謝	血糖	食後10時間以上経過し測定したものを空腹時血糖といいます。食後3.5～10時間未満の状態です測定したものは随時血糖といいます。血糖値が高い状態を放置すると動脈硬化が進み、網膜症・腎症・神経障害などの合併症がおこります。
	HbA1c	検査前1～2ヶ月の血糖値の状態がわかります。
	尿糖	高血糖や腎機能障害などで、尿糖が陽性になります。
尿酸		尿酸は体内で新陳代謝によって生じる老廃物です。高値が続くと、足などに激しい痛みを起こす痛風発作や腎結石・腎機能障害の原因ともなります。

腎機能	尿素窒素	タンパク質を分解した老廃物の一種で、腎臓の機能が低下すると尿中に排泄できず、血液中に増えるため値が上昇します。また尿素窒素は高たんぱく食や激しい運動、脱水などにより上昇する場合があります。
	クレアチニン	
	eGFR	年齢、性別、血清クレアチニン値から算出される数値で、腎機能の評価指標です。
膵機能	アミラーゼ	消化酵素の一つで膵臓・唾液腺から分泌され、でんぷんを分解して糖にします。膵臓疾患（膵炎・すい臓がん）や唾液腺疾患・耳下腺炎などで高くなります。
血清学的検査	HBs抗原	陽性を示す場合は、B型肝炎ウイルスに感染していると考えられます。
	HBs抗体	B型肝炎ウイルスに対する抗体ができているかがわかります。
	HCV抗体	陽性を示す場合は、C型肝炎ウイルスに感染している可能性があります。
	CRP	炎症性病変の早期発見のために有用な検査です。体内に急性の炎症が起こったり、膠原病や悪性腫瘍などで、組織細胞が破壊されると増加します。
腫瘍マーカー	PSA	前立腺がんや前立腺肥大・前立腺炎など前立腺の疾患で高くなります。
	AFP	主に肝臓がんの発見に役立ちます。また、慢性肝炎・肝硬変などの肝疾患でも高くなります。
	CEA	主に大腸がん・胃がん・膵臓がんなどの消化器系を中心とした広範ながんに反応します。また喫煙によって高値を示すことがあります。
	CA19-9	主に膵臓がんや胆のう・胆管がんなどを中心とした消化器系のがんに反応します。
	CA125	主に卵巣がんに反応します。
ペプシノゲン		胃がんのリスク診断検査の一つです。胃の粘膜の萎縮や胃液の分泌状態を調べます。
ピロリ抗体		胃炎や胃潰瘍、胃がんの原因になると考えられているピロリ菌に感染(過去も含む)しているかどうかを調べる検査です。

受診後によくあるご質問をまとめました

Q：紹介状がほしいです

A：当院外来を受診していただき、医師が判断いたします。保険診療となります

Q：かかりつけ医に見せる為、画像がほしいです

A：CDRにしてお渡しできます。有料（2200円）となります。ご本人様に来院していただきお渡しします

Q：健康診断結果報告書をなくしてしまったので再発行してほしい

A：有料（770円）となります。ご本人様に来院していただきお渡しします

Q：本人以外でも結果の説明や書類の受け取りができますか

A：個人情報保護の為、ご本人様への説明・お渡しとなります

やむをえない事情によりご本人様が来院できない場合のみ委任状を記載していただき、ご家族へ説明・お渡しいたします

Q：いつも同じ結果で要受診の案内ですが、毎年受診しないといけないですか

A：健康診断の基準値は診療よりも厳しく設定されています。受診歴や体質等は考慮されていません
診療・処置が必要とならない場合もありますが、異常の早期発見のため受診や精密検査を受けていただくことをお勧めします